産報出版（株）溶接ニュース　2008 年 2 月 19 日　第 2751 号
そこが聞きたい学協会の道標③
以下掲載記事抜粋

「2008 年溶接界新春賀詞交歓会」の席上、溶接学会の平岡和雄副会長（物質・材料研究機構）は乾杯の発声に先立ち、あえて「若い人の確保」の必要性を強調した。
「若手の確保なしに活性化は望めない。技術者の処遇が軽んじられる現状も追い打ちをかけ、ますます若手が育たない」
―　新春早々、溶接界一番の問題を指摘した。「マイナーな話はしたくないがあと 10 年経てば、現在 62、63 歳の会員のほとんどは会社を離れる。こうした実態を踏まえ、いかに持続的な発展を遂げていくか。中堅を含む若手が楽しく働ける環境づくりとともに、いまから世界に対してモノを言える新しいリーダーを育てる必要がある。」
―　中堅の技術者は所属する企業でも責任ある立場として多忙では。「確かに忙しい人が多い。しかしその世代を引き込まないと、若手もついてこない。そこで中堅向けに『技術貢献賞』を新設した。電気、材料、構造物など広範な知識が要求される溶接技術者は、ものづくりの重要な存在。この賞を通じ、企業にはものづくり、溶接に携わる技術者の重要性をしっかりと認めてほしい」
―　会員数の維持拡大とともに、将来にわたり安心して運営できる財政基盤の構築も不可欠だ。「ここ 2 年間、論文集の WEB 化などさまざまな合理化を推進した結果、向こう 5 年は安定した学会運営を保証できるめどがたった。会員の掘り起こしに関しては、学会の魅力をいかに作りだすかが大きな課題となる。長期的に会員を増やすには学会活動の面白さを地道に PR するほか、勉強したいと考える人をサポートできる方向性をしっかり固めていくべきだ」「昨年から開始した日本溶接協会、産報出版との連携による『溶接連合講演会』はある意味でマンネリ化を打破するために、新しい風を吹き込んだもの。『ソサエティー』（学会）に出かけることによって新たな知見や討論する機会が得られる場と認識されなければならない」―　溶接をアピールするうえで、表にみえる活動は。「昨年からスタートした NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）による『鉄鋼材料の革新的高強度・高機能化基盤研究開発』では、『高級鋼材の革新的溶接接合技術』がサブテーマに掲げられた」
―　同プロジェクトは 07 年度から 5 年計画でスタートした。事業費総額は 58 億円 5000 万円に上がる。「もともと溶接学会が関連団体との会合で提案した『スーパー・ウエルド・ジョイント』（阪大）、学会の特別研究委員会が示した『純アルゴン・ミグ溶接の新たな展開』の二つがベースになっている。従来とは異なるメタラジープロセスや新しい構造物の安全性評価など、溶接界にはまだ革新化できる部分があることを積極的に発信していく」
―　今年 12 月から公益法人改革が施行される。「今後 2、3 年で、将来のテリトリーを含め新しい溶接学会をつくり直す機会を迎えるだろう。関連学協会は総じて同じ課題を抱えている。あくまで私見だが、仮に同じテリトリーならば、独立した団体ではなく連携することで合理化を図る手立てもある。すべてのものづくりの原点が学協会として存在しているなか、改革を通じてその形が崩れることを懸念する。「自動車、造船、建設機械、鉄鋼など依然として日本の産業界を牽引するのはものづくりだ。ナノやバイオは先進的とはいえ国力を上げる技術には育っていない。ものづくり基盤に不可欠な溶接、材料、鋳造の多くは、中小規模の学協会が支えているケースが多く、連合するものづくり組織という構想があっても不思議ではない。とくに公益法人化にともない、所轄官庁の垣根が取り払われることで、こうした議論の場が広がるかもしれない」
「ここ数年来の合理化によって、溶接学会は前を見て動けるようになった。道半ば、夢半ばではあるが、レールは敷かれた。中堅、若手には過去の技術を伝える伝承ではなく、発展的に新しいことにチャレンジしてほしい」